

こども通信

一年が終わろうとしています。といつても、あと一か月あり、実感はありませんが。

今年も色々なことがありました。個人的には新型コロナウイルスにかかり、大変な思いをしました。

子どもたちもコロナをはじめ、諸々の感染症が次から次に流行し、その対応に追われていたのではないのでしょうか。

冬の降雪も心配です(大雪は「普通通り」に多いとか)。まずは今年を無事に過ごしたいと思っています。

今月2日から、新規保険証の発行が終了し、以後は保険証機能のついたマイナンバーカードに移行します。マイナンバーカードをもち、保険証機能を付加している場合はそのまま



マイナ保険証を持っていく方には「資格情報のお知らせ」という紙が届きます。マイナ保険証の扱いをしていない医療機関や、機器のトラブルでマイナ保険証が使えない場合に使ってください。

こうして見ると、マイナ保険証を持たずにいるのが、一番スムーズなものではないか、と思います。無理にマイナ保険証を作る必要はないようです。

塚田こども医院
 小児科・アレルギー科
 漢方内科

 上越市栄町 2-2-25
 TEL 025-544-7777(代)
 025-544-7779(保育室)
 FAX 025-544-8456

 ホームページ
 www.kodomo-iin.com



感染症情報

インフルエンザが流行期に入りました。例年より早いようです。まだ少数ですが、今後一挙に流行が拡大することも考えられます。基本的な感染対策をお願いします。

新型コロナウイルスも少数ながら発生があります。新しい変異株が出現したという情報もあります。今後の動向に注意してください。

マイコプラズマ感染症が大きな流行になっています。小中学生に多く発生しますが、年齢の小さな子や保護者の方にも拡大しています。潜伏期が2〜3週間と長く、収束するまで時間がかかることも考えられます。熱と咳が主な症状です。専用の抗生剤が必要です。

RSウイルス感染症の発生は少なくなりました。

手足口病の発生はまだ続いています。今年2回目の流行で、1回目とは違い、発熱や発疹の出方は少なく、軽い印象があります。

プール熱(アデノウイルスによる咽頭結膜熱)の患者が少しあります。**溶連菌感染症**も時々発生があります。いずれも喉の痛みが特徴です。溶連菌感染症には抗生剤が必要です。2、3日で症状は治りますが、合併症(リウマチ熱、急性腎炎)の予防のために10日ほど長く飲むことが求められています。

感染性胃腸炎の発生は今は少数ですが、少しずつ増加しているようです。冬場に流行することが多く、これからの季節には注意が必要です。

元々マイナンバーの取得は任意です。強制されるものではありません。さらに、そこに保険証機能を付加するのも自由です。マイナ保険証を強制することは、国にはできません。それなら、これまでの保険証をそのまま使っていれば良かったのに、と思うのです(実際、「資格確認書」は保険証とは表題が変わっているのみです)。

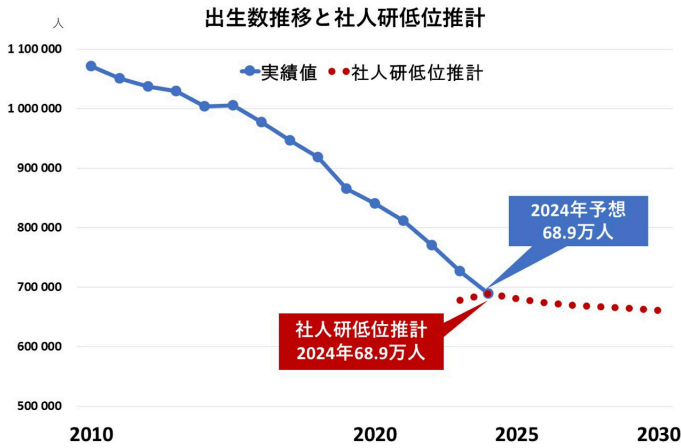
クソつまらない仕事(フルシット・ジョブと言います)を作って、みんなを振り回しているだけです。そもそもが、前のデジタル大臣(河野太郎氏)が記者会見で突然打ち出したこと。その進め方も乱暴であり、とても真つ当な仕事をしているとは言えませんでした。さて、今後どうなるのでしょうか。「資格確認書」を広く使ってもらおうことで、落とし所を探っている。そんな見方は邪推でしょうか。

いっそう進む少子化

少子化の勢いが止まりません。今年前半の出生数が30万人強という数字が発表されました。年間になると60万人台になります。

昨年は72・7万人。100万人をきつたのが2016年ですから、この間の減少数は著しいものがあります。

ちなみに昭和22年（1947年）には270万人の出生がありました。それに比べると、今はその4分



の1ほどです。

ベビーブームが2回ありました。3回目は起きませんでした。

少子化の原因は一つではありません。女性の非婚化、晩婚化、晩産化などが言われています。女性の社会進出も影響があるようです。

しかし、はっきりしているのは若年層の貧困化です。結婚したくてもできない、結婚しても子どもを持つことを躊躇する。そんな経済的なことが大きく影響しています。

今、盛んに「可処分所得の向上」が言われていますが、その根本的なものは給与のアップです。働くところが、非正規（パートなど）ではなく、正規で働けること。

安心して就職し、生活できるようにすることが、最も大切だと思います。

「失われた30年」と良く言われます。賃金水準は伸びず、物価だけが上がっている今の状況を何とかしなければ、少子化対策どころか、若年者の生活水準のアップに繋がりません。

●地域の小児科は？

そんな中、小児科はどうなっているでしょうか。

かつて少子化傾向がはっきりした頃、小児科は「斜陽産業」だと言われました。子どもの数がなくなっているのだから、そう言われるのも仕方ない。しかし、やるべきことはたくさんあると思います。

私が開業してから34年が経ちます。当時は小児科単科の、いわゆる小児科医院はほんの少し。数年後には今と同じ患者数を診ていました。

上越市内には最大7軒の小児科医がいました。それが1軒、また1軒と少なくなり、今では4軒にまで少なくなりました。ピーク時の半数近くまで減少です。

小児医療は肺炎などの重症な感染症は少なくなりました。しかし、多くの感染症が流行しています。また喘息やアトピー性皮膚炎などのアレルギー疾患が多くなりました。予防接種、健診など、広がりがあります。

少子化が進んでいるからといって、小児科が少なくなっていくとは

言えないのでは。子どもたちの大切な生命と健康を守っていくかなくては いけません。

●2026年は？

ところで日本の少子化を考える際に、2年後に重大な問題が起きることを心配しています。

それは丙午（ひのえうま）です。60年ごとにやってくる、干支です。

丙午に生まれる女の子は気性が激しく、夫の命を縮めるという迷信が日本にはあります。そんなこととはないと、冷静に考えれば分かることなのですが。

前回の丙午は1966年。この年の出生数は、前年比25%減。実数で46万人も少なくなりました。脅威の数字です。

先進国で、このような迷信により人口が大きく変わることは稀有なこと。日本人が信心深い？

さて再来年、丙午の年に生まれる子は少なくなるでしょうか。迷信に惑わされることが、日本の少子化傾向に拍車をかけることになるのかも しません。